

---

# チート冒険記

紅龍

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

チート冒険記

### 【Nコード】

N8077R

### 【作者名】

紅龍

### 【あらすじ】

ある日神様の間違いで殺された高校2年生柊 翔ひいらぎ しょうの異世界へのチート冒険記！（技、ギャグ、ネタのみアニメ引用）

## 旅立ち他突然に（前書き）

どうも、紅龍です！

『運命を変える男』は更新が遅くなります！同時進行になるので、こっちも遅くなると思いますが、よろしくお願いします！

### 人物紹介

主人公 柊ひいらぎ 翔しょう

高校2年生 17歳

趣味 山登り ゲーム

ごくごく普通の高校2年生。

神様の間違いで殺され、異世界へ転送されてしまう。

神様 アレス

年齢 不明

趣味 不明

手違いで主人公を殺してしまった神様。1話で登場するが、その後出すかは未定。

今回はこんなもんかな？

では、駄文でよければ、見てください！

## 旅立ちは突然に

俺は、柊 翔（ひいらぎしょう）。

ごくごく普通のアニメやゲーム好きな高校2年生。

普通の高校2年生だったはずなんだが、どういう訳か死んでしまった！

何があったか、説明するには、時間を遡る必要がある。

>回想<

「って、なんで私を無視するのよ！」

ん？何かうるさいな。

「うるさいから、ちょっと黙ってる。今この状況を読者に伝えようとしてんだから」

「だったら、尚更私を入れた方がいいじゃない！」

そういつて、話し始めた。

「私はこの世界n」

だが、話の途中で俺は、リアットをかました。

「ひどいつ！私はか弱い女の子なのに！！」

自称か弱い女の子の抗議の声。

「うるさい！何がか弱い女女の子だ！何がレディファーストだ！そんな物知るかー！！」

過去に嫌な思い出がいくつもある。俺もう死んだから、存分にこいつに憂さ晴らし出来る。

「確かに怒るのも分かるよ？間違って殺しちゃったなんて謝れば済む問題じゃないのは分かってるって！でも、もう過ぎた事と思って水に流してくれない？」

「俺はそこまでお人よしになれないんだけど！」

そう、こいつに『間違って』殺されたのである。

こいつが言うには、こいつは俺が住んでいた世界の神様で、ある家にいる寿命とされていた日にちとなった老人にあの世へ送るための

儀式を行ったのだが、間違えて1軒奥の家にいた俺をターゲットに  
してしまい、そして今、この神様の宮殿に来てると言うわけだ。

「さあ読者に事情は簡単に説明したから早く俺を元の世界に戻せ！

」

すると、胸ぐらを掴まれ、宙ぶらりんとなっている神様から衝撃的  
一言。

「き、君の体はもう灰になってしまったから、蘇らせるのはいくら  
私でも無理」話の途中だったが、拳により、黙らせ、説教(?)は  
続いた。

> 5分後<

「すいませんでしたすいませんでしたすいませんでしたすいません  
でしたすいませんでしたすいませんでしたすいませんでしたすいま  
せんでしたすいませんでしたすいませんでしたすいませんでした」  
5分で神様を屈服させた人間は俺以外に存在しないだろう。あ、俺  
人間じゃないか、幽霊か。ハハハハハ、笑うしかねえ。

「おい、神」

俺はそこにいる神様に声かけた。土下座した体勢の神様は、ビクツ  
と体を震わせると、恐る恐る俺を見た。正直言つて、やり過ぎたな  
と少し反省する。人間にだって、少しは間違いはある。今回はただ、  
その規模が大き過ぎただけだ。そう自分に言い聞かせると、神様と  
おなじ目線になるようにしゃがむと、

「…さつきは悪かったな。誰にだって間違いはあるんだよな。本当  
にごめん」

素直に謝った。

「そ、そんなことないです！全部私の不注意なんですから」

神様は慌てて反論した。さっきの神と同一人物だとは思えなかった。

「ところで、神様。1つ聞いてもいいかな？」

「あっはい！分かりました！あと、私の事はアレスと呼んでくださ  
い」

やっぱり名前とかはちゃんとあるんだな。そんなことよりも…

「俺ってこの後どうなるの？」

死んだから、天国か地獄の2択かな？やっぱり天国がいいな。女神達に囲まれて静かに暮らす…いいかもな。などと妄想していると、神様からいい意味で衝撃的一言。

「今から別次元へ転送します」

へ？なんですって？

「時代背景は中世ヨーロッパ、俗に言うファンタジー、もしくはRPGのような世界でエルフなどの人以外の種族もいますし、もちろん魔物もいます」

「ちょ、ちよつと待ってくれ」

神様はキヨトンとしている。転送だって！？そんなの信じられない！あつ、神様だから可能なのか。…ちがうちがう！！転送できたとしても、俺は何をすればいいってんだ！思考がこんがらがっていたが、神様の戸惑った顔を見て思わず質問した。

「俺は何も魔法使える訳じゃないし、武器もない。これでどうしろっていうんだ？」

転送されたら、魔物がいてお陀仏なんて嫌だ。生き返ってすぐ死ぬなんて惨めにも程がある。しかし神様は誇らしげに、こう答えた。

「大丈夫です！体力や魔力はそこにいた英雄と呼ばれていた人の10倍、さらに想像具現化能力などのボーナスステータス付きで転送します」

おいおい今の説明が事実だと言うなら俺チート過ぎやしないか？

「でも、転送できる場所が悪条件なので、申し訳ないのですが、人里までは少し歩く事になるのですが…」

「そんなデメリットいって！そこまでやってくれて感謝するよ！」俺は心から感謝の気持ちを伝えた。神様は嬉しそうに笑顔を見せると、すぐに真面目な顔で、床に手を付けると、俺の足下には魔方阵が広がった。

「最後にこれを、向こうの世界で中を見てください！旅の無事をお祈りしていますー！！」

「いろいろあつたけどありがとう！俺頑張ってみるよ！」

決意を胸に俺は旅立った。その時、俺は光に包まれて消えるのだと、先入観を持っていた。しかしそれは、間違いだった。魔方陣の中心に穴が空き、まっ逆さまに落ちてしまった。

「聞いてねえ〜！」

神様は今気づいたのか、穴へ落ちていく俺に向かって、大きな声で、「すいませーん！！！！！」

と叫んだ。

俺みたいなドジもう踏むなよ…そう思いつつも無情にも俺は落ちていった……。

「痛！」

俺は森の中に落ちたようだった。腰をさすりながら、立ち上がり辺りを見渡した。周りは木、木、木、木と木ばかりだった。たまに得体の知れない雄叫びのような物が聞こえるが、気のせいだ、気にするなと心に言い聞かせつつ、そこら辺にあつた木に寄りかかると、さっそくアレスからもらった物をみた。

それは革で出来たリュックサックのような物だった。中には、この世界の地図（今自分がいると思われる場所に赤い印がある）、コンパス、水筒（ある程度水が入っている）、テント（折り畳みで相当コンパクトで軽い）、毛布などいろいろあつたが今は出すのをやめて、地図とコンパスを見た。俺は前の世界で山登りを父親と一緒に行ってた。そのため、一応ということであつたが、サバイバル知識は頭に入れていた。自分の場所と近くの人里までの距離を測った。「ここから、東に2キロか…余裕だな」

高校では陸上部で得意競技が長距離だった。それに加えて、異常な体力が後押ししてくれる。

「よし、走ろう」

決めて、地図、コンパスをしまい、立ち上がると、目の前から、角

を生やした大きな熊や異常な大きさの狼、角からバチバチと放電している鹿が俺を見据えて近づいて来た。

「もしかして、先頭フラグ？」

もしかしくなくても、戦闘フラグだろう。3体は何を思ったのか突撃してきた！

「突っ込んでくるな！！」

だが、走ってくる。こっちに向かって。

「うわっやられるっ！」

その時、早々にこの世界にお別れを告げた。だが、それはいい意味で裏切られる。

ガキン！！

何か固いものに当たったような音がした。恐る恐る目を開けると、  
「信じられない…これは、何？」

俺の周りを青い膜が包み込んでいた。そして、勢いよくぶつかった3体はその勢いのまま後ろに吹っ飛んでいた。青い膜には日本語でこう書かれていた。

『自動結界精製能力』

一瞬考えたが、思い当たる節があった。

『ボーナステータス付きで転送しますので』

あの神様やつぱりすごいわ…。こんな便利な能力付けてくれるなんて正直予想外だった。そして、さらに思い出す。

『想像具現化能力』

それだ！そう思い、早速想像する。

「具現化するのは剣！名前は『正宗』だ！！」

すると、いつの間にか、手には俺が想像した『正宗』があった。F？10のアー？ンが装備できる形が特徴的な大剣である。だが非常に重い。

「こうなったらやけくそだ、『正宗』軽くなれ！」

無理だと思いつつも叫んだ。すると、何もない所から

『性質変化能力』

と出て、気づくと、まるで体の一部のように重さを感じなくなった。俺は体の前に『正宗』を構えると、3体の方へ体を向けた。しばらくもがいていたが、俺が武器を構えたのを見て、体勢を整えた。これが俺がこの世界に来て始めての戦闘だった。

まず、狼が飛び掛かってきた。全長3m位だろうか？そんな巨体だが、腹ががら空きだった。

（チャンス！）

俺は縦一直線に腹を斬った。狼は周りの木をなぎ倒しながら、数十m吹っ飛んだ。啞然としたが、そういう暇もなく、次は鹿が突進してきた。俺は冷静に少し横に避けると、来た鹿を野球のバットのようにフルスイングした。鹿は狼と同じく吹っ飛んでいった。

最後だな……。そう思い、熊を見た。全長5、6mはありそうな体には斬り傷のような物がいくつもあるのを見て、直感でこいつは強いと感じた。熊はすでに臨戦体勢だ。

「ふう……やるか」

『正宗』を構えて、熊に向かって走りだした。熊は腕を振り上げ、思い切り振り降ろした。

だが、その腕は空中に吹っ飛んだ。俺が根元から、『正宗』で斬り落としたのだ。その勢いのまま、腹を斬り裂いた。

戦闘は終了した。もう動かなくなった3体の魔物の体からは血が流れ出ていた。しかし、俺はサバイバル知識を覚える際に、狩りをしたことがあったため、少しは耐性があった。もちろん、かわいそうだとも思う。しかし、生きる為には必要な犠牲だ。そう言い聞かせながら、3体のもとへ行くと、剥ぎ取れそうな物を調べに行った。別に、ゲームに依存している訳じゃない。地図の下にアドバイスが書いていたのだ。

『アドバイス3：モンスターの素材は売るとお金になるので剥ぎ取っておこう！剥ぎ取れる素材は剥取可能部位識別能力で分かるよ！』と書かれていたためである。

早速見てみると、剥ぎ取れる部位が赤く光っていた。狼からは毛皮

（剥ぎ取った後なめした）、牙。

鹿からは角（雷は本体が死ぬ事で消えるらしい）。

熊からは角、毛皮こつちもなめしたを手に入れた。

剥ぎ取りおわって、空を見ると、太陽が真上にあった。

まだ大丈夫だな…。そう思い、地図のアドバイスを見てみた。

『アドバイス1：リュックサックには重量無効、無限空間の魔法がかけられているので、安心してどんどん入れてください！』  
つくづく凄いな、このリュックサック。

『アドバイス2：想像具現化能力で作られる武具（防具も含む）は3つまで作れます！いくらチートでもこれが限界です！また元は生きていたものまたはお金、生き物は製造不可能なので注意して下さい！』

マジですか！？まずい…後2回しかないのか。ちゃんと考えて使わなきゃな。

『アドバイス3：省略』

さっき見たあれである。これを見ると、ほとんどモ？ハ？だと思った。

『アドバイス4：ここには見た通り4つの大きな大陸がありますが、大陸ごとの気候も違えば、魔物の生息分布なども違います。大陸が違っただけであらゆる面で大きな変化があるので、注意しましょう！』

そこまで変わる物なのか？この世界は東西南北に1つずつ大陸があり、今俺は、東の大陸の西よりにある森の中にいる。しかもここは北と南の境目に位置しているためか、比較的快適な気温、湿度だったため、正直安心していた。今俺は、前の世界で着ていた学ランを着ていたが、あまり暑いとも寒いとも思わない。

その他、アドバイスがいくつもあったが、読んでいたら、日が暮れるので却下。

「こつちの方角で…合ってるな」

俺は歩き出した。さっきみたいな魔物の襲撃を警戒したためである。

「魔物来なきゃいいな…」

周りを警戒しながら先へ進んで行った……。

## 旅立ちは突然に（後書き）

どうだったでしょうか？

こんな駄文でも感想・意見をいただけるなら、幸いです。  
これからもよろしく願います！！

## スファート part 1 (前書き)

どうも、紅龍です。

今回も駄文です！

読まずに戻るボタンをクリックを推奨します！！

最近になって、携帯で打つことに限界を感じています。

そんな俺ですが見ていただけたら幸いです( ^ - ^ ) b

では、主要人物紹介です！

ローク

17歳

スファートの町の役場に勤める青年。

性格は真面目で神への信仰心が強い。

ガンテス

40代

素材屋を営むこの道20年のベテラン。

16〜19歳まで冒険家稼業をしていたが、怪我を原因に引退。だが後悔はしていないと言う。

マレーヌ

年齢秘密

雑貨屋一筋の肝っ玉母さん。

誰に対しても優しく、世話好きな性格だが、彼女の前で年齢の話は禁止事項。

レイナ

年齢秘密

親から宿屋を引き継いだばかりの新米女将。

明るい性格で、特技が料理。彼女の料理の腕は確かで、町の中では

料理を食べに来る人もいる程。

こんなものでしょうか？

では、こんな駄文でもいいなら、どうぞ！！

## スファート part 1

稀に魔物に襲われながらも、今、真っ直ぐ前に延びる道の上に俺はいた。その道の先には、人が住んでいるだろうと思われる町の門が見えた。

「ふう、やっと見えたか」

心なしかすごい安心した。よく見ると、人影や馬車があるのを見て、さらにホッとした。

ここまで来るまでに、3、4回魔物に襲われた。その時、余裕が生まれていたため、自分の能力を確かめたくなった。結果、このような事が分かった。

・自分が今までに見てきたアニメやゲームの魔法、技、能力が自由に使える。

・その時、アイテムが必要な場合は、一時的に作り出すことが可能。ただし、その魔法、技、能力終了後に消える。

便利であつたが、その時気がついた。

（俺、『正宗』出さなくてもよかったんじゃないか！？）

この原理で行くと、アー？ンのオーバードライブ技、例えば流星かあれ出そうとすれば『正宗』なんか出せただろう。

あの時の自分に怒りを覚えた。もっと冷静に判断しとけばよかった！……まあ後悔してもしゃーないか。

諦めて、町まで歩く事にした。しばらく歩くと、いかにも893的ないかつい男達が立っていた。

（絡まれない様に注意してっつと）

下を向いて歩く事でやり過ぎそうとした。しかし、自分の格好は学ランに靴下（部屋にいたままの格好）なのを見て、嫌な予感がした。「おい、その兄ちゃん珍しい物着てんな」

…やっぱり来た。

大体予感はしていたが、本当に絡んでくるとは。男は3人。2人が少し長めのナイフ、1人が…メリケンサック!? あれは痛いわ。釘みたいなやつ何本も突き出てるし、流血じゃすまないな…。

「兄ちゃんの荷物置いていけば、命まではとらねえよ」

男達は俺にそう要求したが、俺が動かないのを見て武器を構えた。今じゃ、戦いの雰囲気慣れてしまっている。慣れて怖いわ。

「命の補償はできねえぜ? 行くぞデメエらア!?!」

「「おうよ!!」」

3人が走ってくる。だが、恐れる事はなかった。

「行くぜ」

オーバードライブ:チャージ&アサルト!!

手にはテイ?ダのア?テマウエ?ンが。体が軽くなる。相手は、

「どこから武器を出しやがった!?!」

「怯むな! 突っ込め!!」

などと言っているが、気にならなかった。素早く相手に斬りかかった。

「グハツ!!」

斬られた腕を手で抑え、呻き倒れる男。

「くそ、あいつどこ行きやがった!」

俺の姿は常人以上の能力とチャージ&アサルトのスピードで見えないようだ。構わず、もう1人の腕に斬りかかる。血が噴き出し、もう1人も呻き倒れた。

「あとはてめえだ!!」

どこからか聞こえる声に、リーダー格と思われる男は、

「ヒイ! 助けて、助けてくれよう!!」

とあえいでいる。哀れだ。

「1つ聞いてもいいか」

「な、なんだ!?!」

俺は慌てている男に聞いた。高速で移動しながら話しているのだが、

疲れてはいなかった。

「お前らは今までこんな山賊まがいの事をして、被害者に助けくれと言われて何をした？」

男達は何も言わずに下を見たままだった。微かに震え、表情を恐怖に固めている。

「これは俺の推測に過ぎないが、荷物や身ぐるみ剥がしたり女を捕まえて売ったりしてんじゃねえだろうな？」

この世界に奴隷商人がいるかなんて知らないが、ファンタジーの世界でも、『女と荷物を置いてさつさと消える！』とか言う山賊や、いろいろと理由付けて、女の子を拐って売る奴隷商人とかの所謂『闇』の部分がある訳だ。無い方がおかしい。どの世界にも完璧なんて無いに決まっている。現に俺をこの世界に転送した神様だって完璧じゃなかった。俺はそこにいる男を見た。返事は……無い。

「無言は正解。どこにいるんだ？」

勘で言っただが当たっているとは思わなかった。リーダー格と思われる男は町の方を指さした。

「あのスファートの町にある俺らが住んでいる家にいる」

リーダー格と思われる男がそう答え、

「さあ言っただろ！？だから、助けてくれよ！」

と言った。

（チャージ&アサルトはまだ発動途中なんだが仕方ないか）

俺は男の正面で動きを止めた。手にあった武器はいつの間にか消えていた。

「捕まってるのは何人だ？」

「さ、3人だ」

男が答えた。

「じゃある程度怪我治してから行くか」

そう言っつて、斬りかかった2人のそばへ行くと、

「ケアル！」

2人の怪我が痕が残るもふさがり、血も止まった。

「治したんだから早く立て。待っているのは人だ、物じゃない」  
3人をリュックサックにあったロープで縛り、引きずる様に町へ向かって走り出した。

5分後

「やっと着いたぜー！」

町に着いたのを喜ぶ前に、町の役所へ行き、事情を話した。

こいつらがスファートの町で山賊まがいの事をしていた事。

その時に女の子を拐って、売って金を稼ごうとした事。

それを聞いた役人は3人を引っ捕らえ、住所録を調べた上でその家に突入した。まだ仲間が2人いたが、

「昇・龍・拳！！」

「グッ」

「上手投げ！」

バタン！

などとやって、難なく倒した。そして、家の中を調査すると、役人の1人が

「この瓶の下に扉の様な物が！」

「な、なんだってー！」

役人が指さした先には、確かに取っ手が付いた扉の様な物が…。

「絶対地下室あるだろー！」

という訳で瓶をどかし、扉の様な物を上に引くと、予想した通り下に続く階段がそこにあった。

「明かりが無いな…」

役人が思案している様だが、じれったくなって、リュックサックからランタンを取り出し、役人に渡した。

「おお、ありがとう」

そんな事言っていないで早く行ってくれ…。口には出さずに、心の中で留めておいた。

そして急ぎ足で降りて行くと、

「ウツ…ウツ…」

泣き声が聞こえて来た。弱い声で泣いているのが聞こえてくる。

さらに俺は役人達よりも先にと歩みを進めた。

そして、階段の先にあった部屋に着いた時、予想以上の環境の悪さに愕然とした。

3人とも両手両足を荒縄で縛られ、口には猿ぐつわをされていた。

3人の内2人が高熱を出しているのか、力なく倒れている。

唯一熱を出していない女の子がこつちを怯えた様な涙目で見ていた。なんてこった…。

予想以上の荒れ様に愕然としていたが、すぐに行動を起こした。

女の子に、

「安心しろ、俺やすぐ来るおじさん達はみんな君の仲間だ」

そう言いつつ、両手両足の荒縄を引き千切る。縛られていた所が痣になっていた。他の2人も引き千切ると、おでこに手を当てた。

「すごい熱だ…！」

ここでようやく、役人達が来た。来た瞬間、高熱を出している女の子2人を見て、驚愕してこう叫んだ。

「こ、これはカオス病だ…！」

カオス病…？

「なんだよ、それ!？」

「この辺で広まっている病気で高熱を出しているのに顔が青くなる病気だよ！抵抗力のない子どもは死ぬ場合もある…！」

なんだと！ここにいる女の子は心身共に衰弱しているはずだ。このままじゃ…

2人は死んでしまふ

「治す方法は無いのかよ!？」

「それがまだ発見されてないんです…。」

俺は絶望した。

何も出来ずにただ見ているなんて嫌だ!!その時、俺は思い出した。神様のあの言葉を。

『想像具現化能力などのボーナスステータス』

もうそれ以外に方法がない。無限の可能性にかけ、2人に両手に向け、力を込めた。

イメージするのは、障害を払い、相手を救う癒しの力――。

何もない空間に浮かび上がった文字は

『生物治療能力』

忘れてた…俺の能力は…『チート』だった。

気が付くと、高熱は消え去り、心なしか穏やかな表情を浮かべ、眠っていた。

役人の人達は口々に、

「あいつは何者だ…」

「信じられない」

「もしかしたら神様の使いかも…」

などと言っている。最後の人、ある意味正解。

泣いていた女の子は手と自分を見比べて、啞然としている。痣まで治療したのか…。つくづく便利な能力だな。

そう思いながら、立ち上がろうとした時、

「くっ」

目眩が…。体を役人の1人が支えてくれた。

「君大丈夫かい!？」

「ああ、はい大丈夫です。自分で立てますよ」と言っ、立ち上がると、

「それよりも、この子達の保護を頼みます」  
そう言つて、階段を登り始めた。

外の光が見えてきた。

うおっ、眩しい！

…自重しておこう。

しばらくして、登つて来た役人の人達に聞いた。

「すいません、魔物の素材売つて、宿代にしなきゃいけないんです  
けど、素材屋といい宿誰か知りませんか？」

即座に2、3人が同行したいと立候補してきた。

結果、1人に絞られ、ロークと自己紹介された。その後、素材屋に案内された。その時気づいたのだが、文字も日本語訳出来るらしい。看板を見たら日本語で スファート素材屋 と読めた。入ると、そこら中一体に毛皮や角、牙などいろいろあった。

「よう、ロークと…旅人か？」

「そうなんです。素材屋の場所を聞かれたので案内してきましたんです。」

俺は2人の会話を気にせず、見渡していたが、会話が途切れたのに気付くと、

「俺は柊 翔つて言います。」

「ヒイラギショウ？随分長い名前だな」

「あ、いや俺の事は翔つて呼んで下さい。」

「ショウだな、覚えておくれ、俺はガンテスつて言うんだ、よろしくなショウ！」

そう言つて、握手を求められたので、それに応じて、手を握った。

「じゃ、本題だな。売る素材を出してくれ」

「あっはい！」

と言つて、リュックサックに手をつ突っ込むと、一気に引き出した！

ドババババツ！！

ここにくるまでに溜まった素材がカウンターの上に乗りきらず、少し落ちた。それを見たガンテスさんは、

「こりやどえらい物が来たな…。シヨウ！しばらく待ってる！なるべく早く終わらせっからよ！！」

そう言つて、素材を抱えて奥へ行つた。

待っている間、俺はロークと話していた。

最初は、どこにでもありそうな世間話だったのだが、その流れが変わったのは、ロークのこの一言だった。

「ところでシヨウさんは、神様の使いなんですか！？」  
何ですって？

「いやいや、違うから」

「でも、あんな魔法見た事がありません！」

俺はただみんなの出来ない事が出来るっただけであとは普通の……

…、すいません。嘘です。神様に転送されました。その前に神様に一回殺されてます。普通じゃないね、うん。

「あれは古の技術的な物なんだよ」

苦し紛れな嘘をついた。

「そうなんですか…」

あまり納得していないようだ。ああ心が痛い。

そうこうしているうちに、ガンテスさんが戻ってきた。

「全部で金貨2枚に銀貨21枚、銅貨64枚だな」

と言つて、ずっしりとした布地の袋を手渡された。

「重っ」

かなりずっしりくるんですが…。俺はロークに聞いた。

「雑貨屋とかない？財布みたいなのが買いたいんだけど」

「ああありますよ、早速行きますか？」

「お願いします」

「じゃガンテスさん失礼します。」

「おうよ！また来いよシヨウ！」

そう言われ、素材屋を出て、雑貨屋へ来た。

雑貨屋は、生活雑貨からアイテムまで色々売っていた。

「いらつしゃい！ん？見慣れない顔だねえ、旅人さんかい？」

「あ、はい！シヨウと言います。」

「シヨウだね？わたしはマレー又って言うんだ。よろしくねえ」

「よろしく願います。ところで財布ありませんか？出来れば沢山入って丈夫な物を頼みます」

「お安いご用さ、これなんかどうだい？」

マレー又が持っていた財布は、全体が黒く、4つのポケットがある。見た目よりも多く入るらしく、丈夫だ。

「じゃそれ下さい！」

「はいよ、銅貨10枚だよ」

代金を払ったら、カウンターを借りて、財布にさっきのお金を入れた。

「よし、これでOK！じゃ宿屋まで案内よろしく願います」

「分かりました！」

そう言って、マレー又さんに挨拶すると、宿屋に向かった。

宿屋に着き、ロークと別れた後、宿屋の人に、

「一泊いくらですか？」

と聞くと、

「銅貨6枚ですよ」

と答えてくれた。

「なら、まず5日分よろしく願います」

と言って、銅貨30枚渡した。

「部屋は、上の3つて書かれた部屋です」

鍵を渡された。といっても、前の世界にあったような鍵じゃなく、本当にファンタジー的な宝箱の鍵みたいに見えた。

「食事はすぐ用意しましょうか？」

「はい！頼みます」

俺は部屋の扉を開けた。

掃除がちゃんとしてあるようで、床が鏡のようであった。1人部屋にしては広く、トイレに洗面所、シャワーまで完備されている予想以上に良い条件でびつくりした。

荷物を置いて、財布だけ持つと、下へ向かった。

「ふう食った食った！！」

もう腹に入らない位、いっぱい食べた。

「美味しそうに食べてもらえてよかったわ」

さつきカウンターで話していた人と自己紹介しあった。

「シヨウ君ね？私はレイナよ」

「よろしく願います。レイナさん」

「レイナさんなんてよしてよー！レイナでいいわ！」

「は、はあ分かりました」

「あ、あと敬語も禁止ね」

「ええっ！？」

「駄目なの？」

こつちをじつと見つめるレイナ。

どこを見ればいいか分からない翔。

結局、レイナの要求は呑まれることになった。

部屋に戻ると、シャワーを浴びたのだが、

「困った…。着替え無いの忘れてた…」

何せ、家に俺の着替えが全部ある上に、リュックサックの中身は、

野宿を前提に考えられた物であり、着替えなどといった物は入っていない。少し悩んでいたが、思い出した。

「そうだ、『想像具現化能力』!!」

想像するのは下着!

想像して、創造する。

出て来たのは上下真っ黒の下着だった。

「便利だけど、なぜ真っ黒?」

もっと違う色が出来ないのか?

そう考え、想像する。

想像するのは、白い下着!

結果、普通に出来た。想像次第でどうにでもなるらしい。俺は、パジャマも作り、着替えると、ベッドの中に入り、すぐに眠ってしまった。

一方その頃、役所は大変な事になっていた。

「私たちを助けてくれた人はどこにいるんですか!」

「今宿屋に泊まっているんだ。でも夜中だしもう寝ただろうしな」

「場所はどこにあるのよ!」

「場所はここだけ」

ロークが町の地図のある場所を指す。3人の女の子はその指の先の場所をガン見すると、それぞれに

「早く会いたいなあ」

「会ったら、なんと話せばいいんでしょうか…」

「寝ててもかまわないわ、顔だけでも見に行きましょ!」

と、話して盛り上がっていた…。

## スファート part 1 (後書き)

どうだったでしょうか？

駄文ですいません。

？「そんなに卑下する必要はないと思いますよ？」

あれ？なんでここにアレスさんいるの？

アレス（次からアに省略）「それはですね、きっと1話の後は出番  
ないのではないかと思いますよ」

そうとも限らないぞ！？……たぶん。

ア「たぶんって何ですか！？どうせ出番無いならはつきり言っ  
てくださいよ！」

じゃ今のところは無い！

ア「あ、あれ？今のところってどういう事ですか？」

そのままの意味さ。今のところは無いけど、いつかは出したいと思  
っている。

ア「紅龍さんって本当はいい人だったんですね」

急に態度変えたよ、この神様。

ア「だって小説の脇役にとって出番がある事は一大事なんですよ！  
それが久しぶりなら尚更……」

分かった分かったから落ち着け！

ア「分かったならいいんですよ」

それよりも次回予告ですが……

ア「あまりにも分かりやすい伏線張りましたね」

俺には文才というものが無いんだよ！悪いかよ……！

ア「開き直らないでくださいよ！」

では、そろそろこの辺で……。

これ以上やると、自分が嫌になる……

ア「紅龍さん頑張って下さい……！あつ、それでは皆さんさようなら  
……！」

## スファート part 2 (前書き)

どうも、紅龍です！

相変わらず駄文ですが、よろしく願いします！

それにしても、びっくりした！『運命を変える男』の時はポイントも入って無かったのに、こっちはポイントが入っている所か、お気に入りに入れていただきありがとうございます！もう感謝です！これからもよろしく願いします！！

## スファート part 2

朝日が眩しい…。

「……君」

ん？誰だ？母さんか？

「母さん、今何時…？」

その時、ボヤけていた視界がはつきりして、目の前には、少し怒った表情の若い女性が……え？若い？俺の母親はそこまで若い訳が…

「私はまだ独身よ！寝ぼけているからってちよつと傷つくんだけど」そこにいたのはレイナさんだった。って俺今変な事言ったよね？

「レ、レイナさん！すいません、寝ぼけてあんな事言ってしまった」年増に見られたのがとても嫌だったようだったが、すぐ気を取り直し、笑顔で、

「もういいよ、それより、朝食出来たから早く来てね！」

そう言つて、部屋の扉に向かって、ノブに手を伸ばした時、振り返つて笑顔のまま、

「でも2回目は許さないよ？」

そう言つて、部屋を出ていった。俺は思う。

『やっぱり女つて怖いな』

俺はしばらくベッドの上で固まったままだった。

しかし、こうもしていられない。遅れたら、さらに機嫌が悪くなりそうだからだ。

『想像具現化能力』で自分が元の世界で着ていた私服を想像する。

すぐに黒いパーカーとジーンズが出てきた。

「つくづく便利だな…これ。」

すぐに着替えて、顔を洗うと、下へ急いだ。

「うまつー!!」

今俺はシチューの美味しさに感動していた。

「そんなに褒めても何も出ないわよー!」

いやいや、ガチでうまいですって!俺の母さんももう少し料理がうまければ……やめよ。また機嫌が悪くなるのは御免だからな。

「そう言えば」

ん?なんだろう?

「忘れてたんだけど、出来るだけ早く市役所に来て欲しいってロークが……」

「マジですか!?!」

「え、ええ朝早くに来たわ」

…なんだろう。厄介事じゃなきゃいいな。

「てか、急いだ方がいいのかな……」

「た、たぶん……」

「……」

「……」

俺は慌てて残りを平らげると、リュックサックを持って宿屋から飛び出した。

「いつてらつしゃい」

「行つてきます」

手を振りながら答えて、全速力で市役所に向かった。

市役所に着くと、ロークと他数人が出迎えてくれた。

「これは何事?」

ロークに尋ねると、

「一大事なんです!昨日は大変だったんですよ!宿屋に侵入するとか、一緒に添い寝するとか!」

俺は、状況がよく分からなかったが、ロークの肩を叩くと、

「ごめん、ローク。俺は男に添い寝してもらう様な趣味は無いんだ。

だから、ロークの気持ちは受けとれないよ。ローク氣を確かに持て……」

「違うつて！俺だつて願ひ下げだわ！」

ロークは市役所を指さして、

「入れば分かる。まずは入つてからだ。」

と言つて、俺を後押しした。他の役人の人達の深刻そうな表情を見ると、ロークゲイ疑惑ではないようだ。じゃなんだ？無性に嫌な予感がする。だが、逃げることは無かった。ドアノブを手に取り、勇氣を振り絞り、ドアを開けた……。

その時見えたのは予想を反する物だった。

「まだ会えないの！」

「ちよつと待つてて、な？」

「まだですか？」

「呼んだからもう少しで来るはずさ」

「そんな……私達のためにここまで歩いてくるなんて、だめです！今からでも、あの宿屋まで行きます！」

「行き違いになったら元も子もないつて」

3人の女の子とそれをなだめる男の人。しばらくこの4人の会話が続いたが、ドアの前にいた俺を見た4人は一瞬沈黙するも、

「やつと来た！助かつたよ、よく来てくれたな！」

と役人の男の人。

「あ、あなたが助けてくれた人……」

「なんて言えば、なんて言えば……」

「やつぱり素敵……」

と女の子達。

「え、えゝとこれはどういう事ですかね」

とりあえず、男の人に説明を求めた。そうしたら、

「それは俺が説明するよ」

と言つて、ロークが入つて来た。

「昨日の事件で保護されたのがそこにいる3人なんだけど」

マジ！？いや、あの時はあんな場所に入れられて、想像以上にひどい有り様だったけど、今は、体も洗って、服も普通の服を着ていて、血色もいい。あの地下牢と比べたら天と地くらいの差があるだろう。

「それでだな、この世界の法律ではな、奴隷となった子供を助けても、親が分らない場合、助けた人の承諾の元、その助けた人に親権がゆずられるってなってる訳だ」

「なっ！？ちよつと待て！！」

親権がゆずられるって、俺17歳なんだけど！！17歳で子供3人とか笑えないんだけど…。

「それで承諾の方なんだが」

「親権って俺は未成年だぞ、しいて言うなら、この子達と同年代だろう」

それで親とか…説得力無さすぎ。

「大丈夫だ、親権と言うが、ただ保護者の代わりをしてほしいってだけで、あとは関係なんて問題無い。仲間でもいいだろうし、親子関係、兄弟関係でももちろんOKだ」

家族関係や兄弟関係は遠慮しておこう。いきなりあなたの子供ですとか、あなたの姉、妹ですなんて言われても、実感が沸かないだろうし、第一、「お父さん」だとか、「お兄ちゃん」と呼ばれるのは、ちよつと照れ臭いと言うか、恥ずかしい…。だけどここで重大な事に気がつく。

「俺あまり金無いぞ？」

ロークにのみ聞こえる様に話した。

「大丈夫だ。補助金としてこの町から金貨10枚、ここを治めている国家都市の方に申請すればさらに金貨が15枚来る。申請は全過程を合わせて、3日くらいだな」

なるほど、補助金か…。それは予想していなかった。これで金銭的な問題はいくらか良くなったか。

「さああとはお前の承諾次第だ。この女の子達の親権を譲るかどう

か決めてくれよ」

と言われましても…。どうすりゃいいのよ。俺は、女の子達を見た。すると、それぞれ、

「私は出来れば、一緒にいたいですけど」

「連れていつてくれると嬉しいですが…、は、恥ずかしい!!」

「どこにでもついていきます!」

と言って、抗議の声は一切無い。普通は少し時間をくださいとか言つて考えると思うんだけど。3人はそれぞれ性格は違うものの決意は変わらない様だ。

…はあ。なんでこんなに俺は女の子に甘いんだろ。自分が嫌になつてくる。

「…分かりました。親権を譲り受けましょう。」

「本当か!?!」

「本当!?!」

「本当ですか!?!」

「本当に本当!?!」

ええ!?!どんだけ驚いてんだよ! 確実にそんな雰囲気だったろ、今。

「ああ、本当だ。書類とかあるなら渡してくれ」

「あ、ああ分かった」

と言って、渡されたのは1枚の書類と万年筆にインク。名前記入欄にはフリガナの書く所が無いため、カタカナで名前を書けつてことかな?

「ローク、ここつてさシヨウって書けばいいのか?」

「いや、一応正式名書いておけ、確かヒイ…なんだつたつけ?」

「柊翔だよ」

俺は苦笑した。やっぱり珍しいのか? この名前。カタカナで名前欄にヒイラギシヨウと書いた。少し違和感はあるが気にしない事にした。

「ヒイラギシヨウ、それがあなたの名前…ですか?」

なんかぎこちない敬語で女の子の1人が聞いた。

「まあそうだけど、出来ればシヨウウって呼んでくれよ。あと敬語じゃなくてもいいぞ」

そういうと、顔を赤らめながら、

「…よろしくね、シヨウ」

「おう、よろしく！」

「よろしくお願いします、シヨウ君」

「よろしく」

「シヨウ君」！

ギョッ！

「うわっ！腹にしがみつかないでくれ！…苦しいから」朝食った物が出てきそうだ…。うっ嫌な想像しちまった。

「ごめん！シヨウ君大丈夫！？」

「大丈夫だ、問題無い」

前の世界の友達なら、突っ込んでくれた所だが、

「本当に大丈夫なの？」

「無理しないでくださいね」

スルーされた。と言うか知らないから当然である。少し虚しさを覚えた。気を取り直して、書類に目を向ける。

「何々、子供の名前、無い場合は命名して記入…、適当だな」

3人の表情が少し暗くなった。予想はしていたが…まさか…。

「私達実は名前無いんだ。親には『それ』とか『これ』って呼ばれて、最近あの男達に売られたのよ。値段交渉されているときは本当に嫌だったわ…」

3人は泣いていた。最初は我慢していたが、我慢しきれなくて泣いてしまったようだった。自分に出来る事を考えた。そして、俺は3人を抱きしめた。3人はびっくりした様だったが、抵抗はしなかった。

「安心してくれ、俺は君達の事をそんな風には絶対呼ばない。君達の名付け親になっても構わないかな」

3人は泣きながら、

「ありがとう……シヨウ」

「ありがとう……ございます」

「あり……が……と……シヨウ君」

と言われた。

「さあ、笑って笑って！名前を今から決めるつてのに泣いてちゃ後悔するよ？」

3人は涙を拭いて、立ち上がった。3人とも笑顔だ。よかった……、泣いたままだったらどうすればいいか分からなかった。

「じゃ、まずは君だな」

「あ、私から？」

この子には何て名前がいいだろうか……。そうだ！

「よし、君はフレイだ」

「どういう意味なの？」

「自分の故郷に伝わる伝説の勇者の名前だ」

……何となくありそうな話をしていたが、実はあるPCゲームの勇者の名前である。俺はそのゲームにハマっていたため、強く根付いていた。結果がこれである。

「そうなんだ、とりあえず覚えなきゃね」

フレイは必死に自分の名前を繰り返し言っ覚えてようとしていた。

「じゃ次は私の名前！」

「次は君か、ちょっと待って」

となると、次もこの調子で……。

「よし、君の名前はイノだ！」

「イノ……？どんな意味か教えて！」

「イノって言うのはね、さっきの勇者が持っていた命がある聖剣の名前なんだ」

「へえ、そうなんだ、ありがとうねシヨウ君！」

イノは笑顔でそう言っ、残った1人に声をかけた。

「次はあなたの番だよ？」

「ひ、ひゃいっ！」

あ、噛んだ。どんだけテンパってるんだ？

「や、優しくしてください…」

「何か誤解してないか!？」

その子は俺に指摘されると、さらにテンパって、動きが過激になってきた。床はバタバタ、回りの物が少し揺れていた。

「ちょ、ちよつと落ち着け!君の名前決めたから」

その瞬間、動きが止まり、俺の顔を凝視し始めた。

「本当ですか!何て名前なんですか!早く教えていただけませんか!」

肩をブンブン揺さぶられて、首が痛い…、てか首取れるからやめて!痛いから!フレイやイノも突然の事に啞然としている。

「ハッ!す…すみません!!こんな事してしまつて、大丈夫ですか!」

正氣に戻るとまたテンパつて、慌てだした。これじゃ無限ループだ。またあの悲劇に遭いたくない。次食らつたら、今度こそ首が取れる。

「君の名前はティアに決めた!」

「ティア…、いい名前ですね」

やつと暴走が止まった。ティアは俺の目の届く場所に置いておかないと、何をしでかすか分からない。

「ところでティアってどんな意味なんですか?あの勇者さんと関係してるんですか?」

「そうそう、勇者の仲間の魔法使いの名前だ。勇者のサポート役として一役かったと言われている。」

結局、PCゲームのキャラ名をそのまま引用してしまった。まあいいか。3人とも気に入っている様だし?

また、書類に目を向けた。名前を記入すると、次は『年齢』。3人はこれを見て、

「これはさすがに覚えているわ」

「私も」

「わ、私も」

ちょっとホツとした。こればかりはどうにもならないからな。年齢を決めるなんて出来る訳が無い。

「私は17よ」

フレイは俺と同じ年か。まあ普通だな。

「わ、私は16です」

ティアに関してはちよつと意外だった。俺よりも1つ下か同じ年か。大人びているから17、8だと思つてた。

だが、ティアは序の口だった。問題はイノである。

「私は、19だよ」

その瞬間、場が凍りついた。

「あれ、みんなどうしたの？」

イノが疑問形で俺らに聞いてくる。俺は諭すように言った。

「何があつたとしても嘘はいけないよ？」

さらにフレイも、

「確かに私達よりも年下なのが悔しいのは分かるわ。でも、私達は誰もからかつたりしないから、ね？」

俺とティアは頷いた。当たり前だ。誰もからかう訳が無い。だから、本当の事を…、

「なんで慌てているか分からないけど、私は19歳だよ？」

再び、場が凍りついた。

認めたくないが、本当の様だった。

「もしかして、15くらいとか思つてたの！？それはちよつと失礼じゃないかな」

「わ、悪い、悪気は無かつたんだ！」

「私もごめん！」

「すいません！！」

俺ら3人は素直に謝つた。これは完全に俺らが悪かつたな…。ごめん、イノ。

「まあいいけどさ、一応私だって傷つくんだよ？その辺氣にして欲しいな」特にシヨウ君

なんで俺！？それはどういう事よ？俺、フレイやティアとやったこと大差ないからな？

「男の人なんだから女の子を悲しませる様な事しちゃダメなんだからね？」

そう言う事が…。

男の人なんだから女の子を悲しませる様な事しちゃダメ…か。  
前の世界の俺なら言っただろうな。

『何が男の人だからだよ！女の子悲しませる様な事しちゃダメなんて甘ったれた事言うなよ！男女差別反対！！』

でも、今は違った。自分でも変わったのが分かった。もしかしたら、新しい世界に來た事で何か変わったのかも知れない。推測でしかないかもしれない。でも変わった自分も悪くないなと感じた。まあ男女差別反対は変わらないが。

「さあ早く書いて宿屋に帰ろう」

他の欄も書き終えたと、ロークに渡した。

「どこも訂正する場所は無いな。これで登録の準備は終わりだ。じや村からの援助金金貨10枚だ」

こうして渡される時、3人は昔の嫌な記憶を呼び覚ましてしまった。父親といかつい男が金の取引をして、代金を受け取ると、別れの言葉を言う事も無く、笑いながら出ていった。そして、自分を縛って地下に閉じ込めて…。嫌な記憶が頭を巡る。もしかしたらこの人は金を受け取った途端私達を捨てて、どこか行ってしまうんじゃないか…。3人はこの時人間不信に陥っていた。

あの人近づいて來た。何を言うのか、恐る恐る顔を上げた。

俺は3人を見て、違和感を覚えたが、言った。

「お金もらったから、必要な物買いに行こうぜ、ついでに俺の買い物にも付きあえよ？」これからは仲間なんだからな』？」

3人の中にあつた不信感が一気に吹っ飛んだ。すごくほつとした。自分の居場所が出来た事に対して神様に感謝した。

「し、しょうがないわねー！付き合つてあげるわよ」

「私、きれいな服が欲しいな」

「じゃ、じゃあ私は、アクセサリが…」

「待ちなさいよ！私だつて服もアクセサリも欲しいんだからね」

「ちょ、ちよつと待てよ！？そんなに買ったら、出費が大変な事になるだろうが！」

「「「気にしない、気にしない」」」

「なんでやけに息ぴつたりなんだよ！」

賑やかに、役所を後にして、店へ向かった…。

ふう、やつと終わった…。やっぱり女の子の買い物は長いな…。メインの買い物よりも、その買い物の方がかなり長かったな。結果、3人はそれぞれ服とアクセサリをいくつか、俺は本を1冊のみと言つことになった。ついでに言うなら、今、俺は買った服を持たされている。3

「シヨウ君、服とか買わなくてよかったの？」

「ああ、俺には買わなくても服が手に入るからな」

「えっ？それってどういう事なのよ？」

「フレイやティア、イノはもう仲間だから隠す事もないだろ。」

「すべて部屋に行つてのお楽しみさ」

そう言つて、いきなり俺は走り出した。

「早く帰るぞー！俺は早くこの服とかアクセサリ置きたいからな！」

と言つて、走り出した。

「ちよつと速すぎ！」

「待つてよー！」

「皆さん待ってくださいよー!!」

俺らは宿屋まで走っていった。その時、俺達全員同じ事を思っていた。

『この幸せな時がずっと続けばいいな』

## スファート part 2 (後書き)

どうだったでしょうか？

俺的には頑張った方だと思っんですが、はあ…。

ア「どうしたんですか？ ため息すると幸せが逃げますよ〜！」

いやさ、文章力欲しいなって思ってたさ…。このままじゃ、スランプに落ちてすぐ消えそうな気がする。

ア「そんな事言わないでくださいよ！！ そんな事されたら、私どこるか翔君まで活躍の場を失っちゃうんですから！ もっと気合い入れて頑張って下さいよ！！」

そう…だな。よし、頑張るぞ〜♪

ア「その意気ですよ、紅龍さん！」

じゃ、次回予告！

フレイ達に自分の『想像具現化能力』を見せるのですが、それを引き金に大変な事が…！（予定）

ア「（予定）って何ですか！？ もっと自信持つてくださいよ」

いや、気合いはあるんだよ？ ただ、不安なだけ。

本当、文章力欲しいな〜。

ア「このままじゃ、無限ループですね。じゃ見てくれた皆さんまた次回をお楽しみに！」

P・S・ 次回更新少し遅れるかもしれないです！

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n8077r/>

---

チート冒険記

2011年10月8日18時43分発行